

軍隊？運隊？

伊藤 豊造

中野三丁目

「軍隊は運隊である」。こんな言葉が戦争中にはよく聞かれたが、秒間の何分の一であたら命を落とした人も、ただ一人生きながらえた人も、正に運一つで人生を大きく左右されたものでした。

これも運なのか、あの戦争のまった中で、とうとう終戦まで召集をみない若者もいました。その若者の一人である私の小さな戦争体験(?)を記しました。

大正三年に生まれ、昭和九年時代の「兵隊検査」にあたる同じ年代にとっては、あの雪の中の二・二六事件に始まり、支那事変から太平洋戦争へと進む戦争高揚期での兵隊検査は、一生一度の晴れの檜^{ひのき}舞台でもあり、そうして「甲種合格」は誇りでもありました。

ここ同じ伊勢の地で、昭和九年八月、同じ場所で、同じ月日、日時に同じ教官のもとで検査を受けた人たちは、最後の一言「甲種合格」「第一、二乙種合格」「丙種合格」で、一生を大きく左右されたものでした。

「甲種」の一言で即戦場へと駆りだされたり、戦地に駆りだされ即戦死という悲報が伝えられる中で、毎日のように友人や知人が召集されました。そんな中で、今日か明日かと召集を待ちましたが、私にはとうとう召集が来ず、当時としては考えられないことでしたが（たぶん台帳の隅にでも記されていたかも）、文字どおりの「運隊」という所への入隊で終戦を迎えることになってしまいました。「甲種合格」の誇りを、当時の若者は胸に描き願ったものですが、必ずしも望み通りにはいきませんでした。

私の場合は、痔病のため第二乙種補充兵として合格になりましたが、身内同士では、内心は兵隊に取られないという安堵感から、皆で兵隊のがれを祝ってくれました。しかし昭和十二年、支那事変の戦火が拡大するにつけ、もう乙種合格・丙種合格の区別もなく、次々と毎日誰かに召集令状が舞い込む様になってきました。

一旦召集を受け、体格検査で即日帰還などになった場合は、

近所へは顔向けもできず、一家では一番の恥とされてしまいました。今では考えられない事です、いかに当時の教育というものが恐ろしいものであったかを知ることができました。

私は兵隊には取られませんでした、早くからその地（本所区横川橋）の警防団として、また在郷軍人会の一員として、終始銃後の守りにつき、毎日の様に出征兵士の見送り、英霊の出迎へと多忙な日々でした。そうして気がついた時には、何処の町会、警防団、軍人会からも次々に召集され、残る者は年配者ばかり、若い者というと私一人になってしまい、その為どの会に出て、おエライさんに祭り上げられてしまいました。

各団体、隊の公の物資の配給は、私のハンコを押さなくては自由にならないという様な立場にもなり、軍人会の春秋の演習には、何の軍隊経験もない、戦場での弾の音も聞いたことのない私が、車の上で地図を見ながら、指揮官の様な役目をしていたという、今にして笑えない語り草の一つでもあります、でもあの時は、何くそ負けてたまるかと真剣そのものの固まりでもありました。今思い出すにつけ、あの充実した日々は私には何にも勝る、青春時代の一コマでもありました。

しかし仲間の若者は、病人でないかぎり、ほとんどが戦地にあり、若い自分だけが銃後の守りにについていることに引け目を感じて様になり、すでに敗色濃くなった十九年には、川崎溝ノ口にあった日本光学に、徴用工として自ら希望して入社しまし

た。

ここでも、この工場が千葉県柏市の競馬場跡に疎開することになった時、その作業班長に配属となり、毎日空襲下の爆撃をかいくぐりぬけながら、溝ノ口と柏市の往復を軍のトラックで機械を運びました。半年ほどでやっと疎開の完了をみた時には、すでに終戦となり、この柏工場では何一つ生産も見ずして廃墟となっていました。

ここでも運の流れるままに、あの恐ろしい空襲にも会わず、また東京大空襲では二十余年間住み続けた下町も猛爆にさらされましたが、川崎工場にあったお陰で、そんな中でも命ながらえ、無事今日に至っています。これも運だったのかも知れません。

猛爆の跡に立ち、友も隣人も親方も姿なく、只異様な臭気の中に、黒焦げになった親子の死体をこの目のあたりに見て、言葉なく立ち尽くしました。この地獄絵をこの眼でしかと見届けた時には、只ただこの戦争を始めた者への怒りがふつつつと沸きたつ思いがしたのを、今でも覚えています。

八月十五日の終戦の日のラジオで、天皇陛下の玉音放送を聴きましたが、誰もその意味は分からずじまいで、勝つことを信じていた我々には理解しがたかったものです。

そして、何のことやら分からずじまいで戦争も終わってしまったことが、いつまでも心の何処かに残っていました。